



## ◆年頭挨拶◇

理事長  
**山下 静也**

### 新年、明けましておめでとうございます

2019年末に始まったCOVID-19も6年が経過しましたが、5類感染症となっても感染者は数多く出ています。昨年は大阪・関西万博が開催され、海外からの旅行者が爆発的に増え、コロナ前の活気が戻ってきましたが、病院の患者数はコロナ前のレベルには未だ戻っていません。当センターでは2023年12月からダヴィンチを使ったロボット手術を導入し、特に前立腺癌、消化器癌等を中心により精緻な手術が可能となり、ハイブリッド手術室増設で大動脈弁狭窄症に対するTAVIも開始して順調に症例を増やしており、癌患者に対する外来化学療法数も飛躍的に増えてきました。また、消化器内科は和歌山県立医大関連施設となって診療内容や入院患者数も更にレベルアップし、循環器内科では心房細動等の不整脈に対するアブレーション治療も飛躍的に増加しています。

泉州二次医療圏南部の三市三町において、地域住民の皆様が安心して必要な医療、介護、生活支援を受けられる体制の確立を目的として、救急告示6病院による地域医療連携推進法人『泉州南メディカルネットワーク』を設立し、昨年6月に大阪府により認可されました。最近の医療を取り巻く環境は大変厳しく、特に自治体病院は8割以上が赤字で、大学病院ですら運営が厳しい状況です。新型コロナで厳しい状況を経験し、病病



## ◆年頭挨拶◇

病院長  
**松岡 哲也**  
(兼)副理事長

### 旧年中は一方ならぬご厚情を賜り、 心からお礼申し上げます

昨年も、引き続き国内外ともに混沌とした不安定な世の中でした。パレスチナでは停戦合意されたものの真の解決には至らず、ウクライナの戦闘も収まる気配が見えません。トランプ大統領がノーベル平和賞欲しさに仲裁交渉に乗り出しているものの、足元が定まらず往々にして力のある側に寄りがちで不安を感じ得ません。経済においても、トランプ関税に翻弄されて、株価こそ高値を記録したものの物価の上昇により好況感はありません。我々の医療の世界においても、光熱費や材料費の高騰に加えて消費税の影響で、新規入院患者の獲得に努め病床稼働率をコロナ禍前に戻し過去最高の稼働額を達成しても収支マイナスの状態です。政治の世界では、わが国初の女性総理大臣が誕生し、補正予算で物価高対策に加えて医療機関への補助がありそうですがこれは一時的に過ぎず、やはり来年度の診療報酬の改定が気になるところです。

当院にあっては、昨年6月に漸く地域医療連携推進法人泉州南メディカルネットワークを設立しました。まずは泉佐野保健所管内の急性期病床を有する救急告示医療機関6病院で立ち上げましたが、将来的には泉佐野泉南医師会、行政、回復期・慢

連携や、病診連携の重要性が明らかにされました。泉州地域での救急患者さんの完全な受け入れ態勢を確立し、診療機能に応じた役割分担と病院間連携を強化し、迅速な登り搬送・下り搬送、病院間の人事交流や新興感染症対策、大規模災害対策でも連携して、地域医療を守るという観点から、連携推進法人の意義は極めて大きいと考えられます。当センターも全国から研修希望者が集まり、人気研修病院となりましたが、更に医師を充実させ、地域住民の生命を守る最後の砦としての役割を担っていきます。今後も皆様方のお力添えを何卒宜しくお願い申し上げます。

### 人生を変えた 1 冊

読書家とは程遠い小生に、人生を変えた1冊というのは正直言っていないのですが、大阪大学医学部附属病院の研修医1年目で経験した全身に黄色いでき物(黄色腫)、アキレス腱肥厚と狭心症のある家族性高コレステロール血症ホモ接合体の女性患者さんに関連する薬の話です。その患者さんは所謂悪玉のLDLコレステロール(LDL-C)が600mg/dLを超え、当時は有効な治療法が全くなく、何とかLDL-Cを低下させたいということで、上司の松澤佑次先生と相談して、遠藤 章博士(2024年没)が発見され、第二のペニシリンと言われ、世界で最も多く使われているスタチン(コレステロール合成系であるHMG-CoA還元酵素の阻害薬)の原型となったML-236B(コンパクチン)という青カビ由来の薬を初めて使ってみました。当時倫理委員会などはなく、投与量も動物実験でのデータを元に、全くの推定で患者さんに投与しました。その結果、LDL-Cは少し低下したものの、脱力症状(いわゆる横紋筋融解症に近い状態)が出てCPKが著しく増加したのですが、それでも量を減らして2日に1回の投与で乗り切ることができました。当時循環器病センターにおられた研究室の先輩の山本 章先生のホモ接合体の世界で第1例目に続く、恐らく世界で2番目の投与であったと思います。遠藤博士のこれらの研究は、1985年にノーベル生理学・医学賞を受賞した米国のマイケル・ブラウン、ジョーゼフ・ゴールドスタイン教授によるLDL受容体の発見に大きく貢献しました。スタチン開発には多くの難関があり、その苦労話は遠藤博士により『自然からの贈りもの―史上最大の新薬誕生』(メディカルレビュー社、2006年発行)という本にまとめられています。お陰様でその後は脂質代謝に興味を持って、脂質異常症・動脈硬化症専門の循環器内科医となりましたが、小生にとってはある意味でその後の人生を変えた患者さんの治療薬開発に纏わる1冊と言えます。

性期病院、介護施設なども取り込んで、地域完結型の医療介護複合体を目指しますが、まずは、今後増え続ける高齢者に対する医療、特に高齢者救急医療体制の整備が喫緊の課題です。そのためには6病院の機能分化と円滑な上り下り搬送システムを構築し、個々の患者さんに相応しい医療介護をシームレスに提供できる体制を構築します。

### 人生を変えた 1 冊

本号の共通テーマ「人生を変えた一冊」として、分子生物学者の福岡伸一先生が著した「動的平衡(dynamic equilibrium)」を紹介します。この現象は、生命が「壊す」と「作る」ことを絶えず繰り返しながら、全体としてバランス(恒常性)を保ち続ける状態を指し、これが「生きている」という核心であるという生命観です。福岡博士は、動きが止まることは生命にとって死を意味すること、生物に限らず社会現象の中にも動的平衡状態が存在することを示しました。組織運営においても常に動的状態としての改革の継続があって初めて現状が維持されるのであって、動きが止まった組織は衰退あるのみです。従って、組織が発展するためには、一層の改革が必要です。我々は、現状に甘んじることなく飽くなき変革を続けて、皆様に満足いただける医療をお届けする所存です。

本年もご支援、ご鞭撻のほどを宜しくお願いします。



## ◆年頭挨拶◇

副病院長  
**種村 匡弘**  
(兼)診療支援局長  
消化器外科主任部長  
がん治療センター長  
がん相談支援センター長

### “医療人の熱量”が医療の新しい価値を創る

新年明けましておめでとうございます。  
皆様におかれましては、健やかに新春を迎えられたことと心よりお慶び申し上げます。

平素は、りんくう総合医療センターの運営に多大なるご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、2026年は当センターのみならず日本の急性期病院の経営にとって極めて重要な年となります。近年の人件費や医療材料費の高騰は慢性的な病院赤字という深刻な経営課題を一層浮き彫りにしています。加えて2024年度から本格的に始まった「医師の働き方改革」への対応など医療を取り巻く環境は、かつてないほど厳しさを増しています。このような難局を乗り越えるため、当センターは「経営改善計画の断行」と「医療 DX の推進」を二本柱として改革を進め、地域の皆様に「最新・最良の医療」を引き続き提供してまいります。

しかしながら、私はこのような未曾有のピンチの中、病院を変える千載一遇のチャンスと考えています。すなわち職員の意識改革です。超高齢化時代、多様性が求められる時代を迎えて、病院の新しい存在意義とは何か？を考えると、医療機関と患者様とのより良い関係を築き直すためのプロセスである「人との関係性の再編集」が必須であり、今一度、職員の皆様には「ア



## ◆年頭挨拶◇

副病院長  
**井出 由起子**  
(兼)理事  
看護局長

### 謹んで新春のお慶びを申し上げます

昨年は中期計画の最終年として、病院経営の発展に向け職員一人ひとりが心を合わせて取り組んだ一年でありました。地域住民の皆さまの多様なニーズに応えるべく、現場での努力が着実に実行されたことを誇りに思います。

一方で、診療報酬の仕組みの中では容易に解決できない課題も少なくありません。無駄を省き、病床を有効に活用することは当然重要ですが、さらに大切なのは「危機意識を持たなければ適正な医療の提供が困難となり得る」という認識を、職員全員が改めて共有することです。そして、この使命を果たそうと尽力する職員を公正に評価する仕組みを整えることも不可欠です。弱点補填や消極的な回避にとどまらず、常に正の循環を生み出す組織づくりを今後も追求してまいります。

当院の使命は、地域で暮らしながら治療を続ける方々を支えることにあります。しかし急性期病院の治療だけでは完結せず、患者さんが直面する個別の課題を療養の場が変わっても引き継げることに看護局は力を注いでおります。泉州二次医療圏を中心に、看護をはじめとした「顔の見える関係性」を積極的に築き、その人らしい生活を地域社会の中で実現できるよう、

ワー・ホスピタル”(Our hospital～私たち[自分たち]の病院)の精神を植え付けていただく必要があると思っています。お金を稼ぐための仕事は“Job”。医師・看護師・診療支援局・事務局など当センターに所属するすべての医療従事者は、Jobではなく“Profession”(専門職)であることが必須で、同時に当センターのことが好きで、誇りを持ってほしいと考えています。病院の基本的な本質は「健康を守り」、「命を救う」こと。それを踏まえた上で病院の価値を新しく創造していく。そのためには“医療人の熱量”が十分あるかどうかが重要です。熱量は具体的に数値化できませんが、確実に人を、病院を、未来を変える力があると信じております。

来る巳年改め、2026年丙午(ひのえうま)の年は、午が野原を元気に駆け巡る姿から、飛躍や発展の象徴とされています。りんくう総合医療センターもこの勢いに乗り地域医療の向上、更なる高度医療の提供を目指し、職員一同、馬力をかけて邁進してまいります。

本年も引き続き、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

### 人生を変えた 1 冊

私の人生を変えた一冊、それは義父から譲り受けた義祖父の伝記『**やまと心**』です。  
超硬工具のトップメーカーの創業者である義祖父は、一代で世界的な企業へと築き上げました。この伝記は、彼の生涯における様々な出会いと経営判断の記録です。驚くべきことに、そのどの局面においても、彼は成功へと導く「人」との出会いや「決断」を下しています。読み進めるうちに、これは単なる成功物語ではなく、むしろ人生の岐路における人間関係の深遠さと、未来を見据える経営者の洞察力の重要性を示唆しているように感じられました。私自身、この伝記から、日々の出会いを大切に、勇気を持って決断することの重みを学びました。私の人生の指針となる、かけがえのない一冊となっています。

看護の力をさらに発揮してまいります。

本年も皆さまと共に歩み、地域に根ざした医療の充実に努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 人生を変えた 1 冊

私は看護管理者の道へ進んで約20年が経ちました。患者さんやご家族、そして部下のニーズを探り応えていくことを、自身のコアコンセプトとして歩んでまいりました。相手の立場に立った視野と視座は、物事を包括的に理解する力を育み、私の実践を支えてきたと感じています。

OJTの中で試行錯誤を重ねながら学び続ける過程で出会った一冊が、『リフレクティブ・マネジャー 一流はつねに内省する』でした。この本との出会いは、後に私自身の研究テーマとなる「内省」への道を開いてくれました。

マネジャー自身がどのように学び、成長し、さらに人々の学習や成長に寄与していくのか。そのためには「学びほぐし」を含めた内省の概念が不可欠であり、仕事経験に新たな意味を付与することができる――この気づきは、私の管理者としての姿勢を大きく変えました。

この一冊は、私に「内省こそが成長の原動力である」という確信を与え、今もなお日々の実践を導いてくれる存在です。

